

たします。

中世を通して、ヨーロッパ文化は—それは本質的にキリスト教的な文化であったのですが—2つの源泉に立脚していました。古代異教という源泉と聖書とキリスト教という源泉です。古代異教という源泉は、哲学、修辞学そして詩学を含んでいますが、そのいずれもが世俗に関わるものです。西暦になった直後の数世紀の間、キリスト教の教父たちは古代ギリシア・ローマ文化の遺産を選別し、その中からキリスト教が吸収でき、あるいは受け入れることのできるものを保持し、また、受け入れることのできないものを遠ざけました。そしてキリスト教徒が非キリスト教的古代から借り受けることのできるものをキリスト教的に意味づけて説明するという伝統の基礎を築いたのでした。それゆえ、中世と呼ばれている期間（西暦の5世紀から16世紀までの期間）にもヨーロッパ文化は古代の遺産を持ってはいました。しかしそれは異教文化に関する知識を制限し、偏らせる解釈の伝統を通してであったのです。

ユマニズムは古代とのこのような関係を一変してしまいました。実際、ユマニストと呼ばれている人々は古代に関して「キリスト教的な」偏りのない知識、学問的な（文献学的な）知識を発展させたのです。まさにこうして古代についての知識の入り口が、量的にも質的にも飛躍的に広がることになったのでした。

量的な面では、ユマニストたちは古代から連綿と存続してきたもののすべてを救いだし、理解したいと考えました。彼らが理解したいと思ったのは、元々キリスト教と矛盾しないようなものだけではなかったのです。こうして、彼らは、哲学や詩学、法律、医学などに関する古代の写本を可能な限り調査したのです。中世では通常、読まれることも、研究されることもなかった作品すらこの写本調査の対象となりました。例えば、彼らはギリシアの哲学や詩学について、作品に直接あたって得た知識を増大させたのですが、それらは中世西ヨーロッパにおいてはほとんど知られていないものでした。その当時、人々がギリシア文化を知っていたのは、ただラテン文化を介してのみだったからです。

質の面では、ユマニストたちは今述べたような

古代の作品〔のテキスト〕を確定し、よく理解するための学問的な方法を完成させました。それがいわゆる文献学と呼ばれているものです。彼らは古代のテキスト（例えばプラトンやキケロの作品）の可能な限り最良の版、つまり著者の意図に忠実な版を決定し、再構成するために、同一のテキストの異なる写本を比較したのでした。この著者の意図という概念が重要です。〔ここでは〕近代の読者と古代の著者とが直接に、即ち解釈の伝統を仲立ちとせずに、遭遇できるようにするということが問題なのです。そのためには、古代人である著者が用いている言語（古典ギリシア語、古典ラテン語）、その文体、彼が生きていたコンテキスト、彼が属している歴史などを熟知していなければなりません。カルヴァンは当初、この類のユマニストなのです。例えば、彼は古代ラテン期の哲学者セネカが残した、寛容という政治的かつ道徳的なテーマに関するテキストを出版し、注解したのですが、その際に彼はこの哲学書を、それが書かれた状況の中で理解する助けとなりうるような註を数多くつけているのです。

それではユマニズムに、従ってカルヴァンに突きつけられている本質的な問題を検討することにしましょう。古代以来、異教文化がキリスト教へ絶えず問いかけてきた問題は次のようなものでした。「真理の啓示の源泉はたった一つだけ存在するものなのか、つまり聖書がそのような唯一の源泉なのか、それともこの源泉のほかに、同様の源泉が、例えば、哲学や詩学の中に存在するのか？」真理の源泉はただ一つ、聖書だけであるとする厳格な立場は、事実上、最初から大多数の教父によって斥けられていました。実際、彼らは（哲学、詩学といった）自分たちの時代の文化をすべて一挙に否定し去ることはできなかったのです。それはまた彼ら自身の文化でもあったのですから。そこで彼らは、先程私が言及した選別操作を行ったのでした。例えば、彼らは異教哲学の価値を認めていましたが、しかしそれはこの哲学が「キリスト教的な」神の摂理という考え方や魂の不死性という考え方を認める限りでのことだったのです。この問題が15世紀から16世紀のユマニズム的ルネッサンスの到来とともに改めて問い直されることになりました。しかし今回は、話はそれほど単